

幼児言語における<ヒト>と<モノ>

—表現された名詞における比較—

小 村 晶 子

1. 問題

変形文法は、文の意味や構造を明らかにするには表層構造だけでは不十分で、深層構造が必要だと言うことを明らかにした。表層構造だけではわからない文の性質には例えば、<I EXPECTED JOHN TO LEAVE>と<I PERSUADED JOHN TO LEAVE>、あるいは<JOHN IS EAGER TO PLEASE>と<JOHN IS EASY TO PLEASE>の間の構造上の相違といった統語特性に関するものと、<SINCERITY MAY FRIGHTEN THE BOY>はよい文だが<THE BOY MAY FRIGHTEN SINCERITY>は英語の文としては適格でないといった意味素性に関するものがある。

CHOMSKY (1965) は、名詞の下位素性として± ANIMATE, ± HUMAN, ± CONCRETE, ± COMMON等を挙げている。先の例文は名詞句の有生、無生が文の適格性を左右することがあることを示している。代名詞の選択の際にもこれは重要である。日本語においても、代名詞の選択や、述語との組合せの他、存在文における述語の選択などにも名詞句の有生、無生が決定的に働く。また、このようなEXPLICITな例ばかりでなく、IMPLICITな次のような例もある。柴谷(1978)は「山田先生に借金がありになる」という文において「おありになる」という尊敬表現が主格である「借金」を対象とするのではなく「山田先生」を対象とする等から、「～に」の部分が有生物の場合、存在文ではなく、与格主語をとる所有文であるという。もっとも「辰ちゃんに恋人がいる」という文のように「～に」という部分が有生名詞句であっても存在文である場合もあるので、これは十分条件ではない。この様に名詞句が有生であるか無生であるかは、文の解釈に相違をもたらし、場合によっては適格性の程度にまで影響することがあるのである。

一方子供にとって有生、無生はどのような意味を持っているのだろうか。村井(1978)は子供が成長し、周囲とのコミュニケーションを行うようになるについての<ヒト>と<モノ>の異なった役割について指摘している。まず<ヒト>と<モノ>の異なった役割について指摘している。まず<ヒト>と<モノ>の大きな違いはその能動性にある。<ヒト>は積極的に赤ん坊に働きかけるのに対し、<モノ>はより静的な、中性的な刺激値をもつと考えられる。また赤ん坊の与える刺激に対する反応も<ヒト>の場合は複雑で変化に富むのに対し、<モノ>からの反応はより単調で機械的である。子供は基本的に人を通じて外界操作の方法を習得するのであり、モノはヒトを通して意味を持つことが多いということだ。生後2、3か月で既に人と物を区別し、異なった反応をしているといわれているが(注視、微笑など)、この場合の人

への注視は主にあやしたり笑いかけたりしてくれる人への注視であり、しかも母親よりも見知らぬ人の方をより多く注視する一新奇性に引かれる一ことと、あやされなければ注視はしないということは、人をその能動性ゆえ、より注目するが、まだ物との分化が不十分で自らのよりどころ、自分の世界として人の世界が意味づけられていないのではないかと推測される。

その後6カ月頃よりリーチング(腕をのばしてモノを取ろうとする行為)が盛んになって、注視も人に対してよりも物に対して多くなる。このころには人見知りという現象が現れ始め、母親に対する愛着および見知らぬ人に対する警戒や叫喚が頻繁に生じる。ヒトとモノとの区別が確立してくると共に、それまでとはヒトのもつ意味が変わってくるのである。10, 11カ月頃には発声による要求・情報等の意図表出の対象としての人が確立する(武井他, 1981)ということである。このころに対物注視よりは少ないが(1/4程度)、母親注視が一旦増加する。これは指さしが出現し、「母親を見ながら物を指す」という行動が増加するためである。いわゆる三項関係といわれるものであるが、一旦成立し確立した後は再び母親注視は低下している。母親-ヒト-との関係が当然のこととして前提され、いちいち人の注意を確認する必要がなくなるためであろう。三項関係には物を介した子-大人の結びつきと、人を介した子-物の関係とがあるわけだが、子供の発達にとって重要で本質的なことは後者である。この関係の確立が1歳以降の言語習得の必要条件となるのである。

筆者はこれまで言葉の形態的な発達についていくつかの考察を加えてきたが、今回それらを合わせ、大人の文法においても子供の発達にとっても欠くことのできない名詞の有生・無生-典型的にはヒトとモノ-という側面から子供の言葉の特徴の一端を明らかにしたいと思う。

2. 方法

使用したデータは2名の幼児のオーディオテープによる自然発話記録である。被験児は男児1名(T児とする)・女児1名(MY児とする)で、1~2週毎に各60~90分の観察を行なった。ここで取り扱うのは2語文開始から「基本的文習得の時期」¹⁾(小村, 1978, 1979)及びその後それと同じ期間という基準である。前者を(I)、後者を(II)とする。T児では(I)1:4(=1歳4カ月。以下同じ)~1:9, (II)1:10~2:3のそれぞれ6ヶ月間である。MY児の場合は、発達がかなり早く(I)は1:4~1:7の4カ月であり(II)も4カ月とすると1:11までとなってT児とのアンバランスが大きいので1:8~2:0の5ヶ月間とする。本稿では変化を更に細かくみるために(I)を前後2期に区分した(I A・I B)。各々の月齢・記録時間は表1のとおりである。

分析の方法は子供の発話のうち比較的使用数の多い統語-意味関係²⁾(以下SSRとする。表2)に使用された名詞句を次の5つの意味クラスに分類する。それは<ヒトI>(身近な人。自分・両親・調査者), <ヒトII>(それ以外の人。「おかあさん」「おじさん」といった人間関係を表す語, 「王様」「お医者さん」といった職業や身分を表す語も含む), <動物>(実物以外にぬいぐるみ・絵本の動物や人形も含む), <モノ>(具体物), <その他>(抽象的な語・位置語・関係的な意味を表す語)である。使用数

表1 月齢と記録時間(分)

	T児		MY児	
(ⅠA)	1:4~1:6	720分	1:4~1:5	510分
(ⅠB)	1:7~1:9	660	1:6~1:7	525
(Ⅱ)	1:10~2:3	1000	1:8~2:0	1195
	計	2380	計	2230

表2 統語-意味関係(SSR)リスト

記号	統語-意味関係
A	動作主(ガ)動詞文主語
SO	対象格(ガ)動詞文主語
O	対象格(ヲ)動詞文目的語
G	目標格(ニ)
E	名詞文述語名詞
LO	対象格(ガ)存在文主語
N1	所有表現第1の名詞
N2	所有表現第2の名詞

の多いSSRには存在表現の位置語もあるが、これは「ココ」「アッチ」等の代名詞が大部分であり、普通名詞はわずかである(小村, 1981a)のでここでは省略した。

対象とした発話は動詞文については多項文か、1項文でも格助詞のついた発話である。名詞文は「コレ(ハ)+名詞」「名詞+コレ」という形のみを対象とした。それは子供の場合それ以外(「~ハコレ」「NハN」)がわずかであること、後半にみられる「コレナニ」はかなりパターン化しており、またヒトモノというテーマには直接関係しないためである。所有表現は正確には「名詞による名詞修飾表現」とでもいうべきもので狭義の所有表現のほか様々な意味を表す「NのN」を含んでいる。これは小村(1981

b)で ①使用数は異なるが獲得のプロセスは同じであること、②(Ⅰ)にはN1(「NのN」の第1の名詞)は<ヒト>、N2(第2の名詞)は<モノ>という形が中心であり、そのN1の多様化と、N2の多様化及び意味の広がりとは時期的に一致すること、③狭義の所有表現のN1は有生物が多く、他の「NのN」は無生物や関係的な語と言うような使い分けがなされており、意味の相違はN1、N2各々の個別の素性や環境によって結果として決まってくるものではないかと思われること—という理由で、統語的にも意味的にも質的な相違はみられないと考えるためである。

3. 結果

SSRごとの名詞の意味クラスの使用頻度は表3・表4・図1のとおりである。両児とも意味クラスの使用頻度には大きな偏りがみられ、SSRを特徴づけている。それは初期ほど著しい。T児の場合Aは(ⅠA)で全12例中<動物>が75%(9例)を占め、それに<ヒト>2例を加えると11例(92%)と大部分が有生物である。しかし典型的有生物である<ヒトⅠ>はみられない。(ⅠB)も(Ⅱ)も有生物が92%と大部分であることは変わらないが、(ⅠA)では全くみられなかった<ヒトⅠ>が(ⅠB)で10例(有生物中43.5%)、(Ⅱ)で43例(全体の41.7%、もっとも多い意味クラス)と、後になるほど増加している。

表3 T児の SSRと意味クラス(時期別)

		A	SO	O	G	E	LO	N1	N2	計 ^注
(I A)	<ヒトⅠ>						7	21		28
	<ヒトⅡ>	2				2	2			6
	<動物>	9					9			18
	<モノ>	1				5	3			9
	<その他>				1					1
	計	12			1	7	21	21		62
(I B)	<ヒトⅠ>	10				2	2	62		76
	<ヒトⅡ>	2			2		1	11	6	22
	<動物>	11		3		1	7	10		32
	<モノ>	2	4	37	4	4	21	1	14	83
	<その他>				5					5
	計	25	4	40	11	7	31	84	20	218
(Ⅱ)	<ヒトⅠ>	43	1	4	1	3	7	90		149
	<ヒトⅡ>	28	1		2	5	12	35	69	140
	<動物>	24	4	21		30	48	46	6	179
	<モノ>	8	57	163	36	35	60	6	55	400
	<その他>		8	16	63			11	27	115
	計	103	71	204	102	73	127	188	157	983
計	<ヒトⅠ>	53	1	4	1	5	16	173		253
	<ヒトⅡ>	32	1		4	7	15	46	75	168
	<動物>	44	4	24		31	64	56	6	229
	<モノ>	11	61	200	40	44	84	7	69	492
	<その他>		8	16	69			11	27	121
	計	140	75	244	114	87	179	293	177	1263

注。所有表現と他の SSR の重複を除く。

<ヒトⅡ>も(Ⅱ)で27%とかなりの割合をしめ、動作主の性格が明確になってきている。SOとOは大人の文法では主語と目的語と全く異なる統語的性格を持つが、意味的には同一の性質を持つ。子供の場合、使用数はOの方がずっと多いが、使用された意味クラスはよく似ていて(I A)でゼロ、(I B)~(Ⅱ)では<モノ>中心、<動物><その他>が10%位ずつとなっている。Gはやはりその性格から<その他>〔「ココ」等の位置語〕が半数以上を占めている。Eは(I)では<モノ>が過半数を占めているが、(Ⅱ)にはいと多様化し、いろいろなものが名づけられていることがわかる。LOは初期と後期とで相違

表4 MY児のSSRと意味クラス(時期別)

		A	SO	O	G	E	LO	N1	N2	計 ^注
(ⅠA)	<ヒトⅠ>	5						96		101
	<ヒトⅡ>	1						3	11	15
	<動物>	3				2	10	4		19
	<モノ>		1	3		1	3		19	24
	<その他>				1					1
	計	9	1	3	1	3	13	103	30	160
(ⅠB)	<ヒトⅠ>	32	3	1				142		178
	<ヒトⅡ>	6					6	4	22	38
	<動物>	6	1	6		1	6	5	2	27
	<モノ>	1	10	45	6	5	11	2	74	132
	<その他>				5			1	1	7
	計	45	14	52	11	6	23	154	99	382
(Ⅱ)	<ヒトⅠ>	166	3	6		3	2	468		648
	<ヒトⅡ>	12				2	7	24	101	137
	<動物>	23	2	26	3	20	17	22	19	124
	<モノ>	3	59	312	59	74	53	22	171	650
	<その他>		2	53	59	4		17	27	157
	計	204	66	397	121	103	79	553	318	1716
計	<ヒトⅠ>	203	6	7		3	2	706		927
	<ヒトⅡ>	19				2	13	31	134	190
	<動物>	32	3	32	3	23	33	31	21	170
	<モノ>	4	70	360	65	80	67	24	264	806
	<その他>		2	53	65	4		18	28	165
	計	258	81	452	133	112	115	810	447	2258

注。所有表現と他のSSRの重複を除く。

がみられる。(ⅠA)では<モノ>は少なく、<ヒトⅠ>が<動物>とともに多く使われているが、(ⅠB)、(Ⅱ)では逆に<モノ>が増え、<ヒトⅠ>は少なくなっている。全体としては、Eと同様様々な意味クラスが表現されているといえる。所有表現ではN1は有生物(特に<ヒトⅠ>)、N2は<モノ>と<ヒトⅡ>(人間関係を表す語が多い)が多い。以上を合計したものでみると、(ⅠA)では<ヒトⅠ><動物><モノ>の順であったのが次第に<ヒトⅠ>が減り、逆に<モノ>が増えている。(Ⅱ)では<モノ>が40%、他の4つの意味クラスはほぼ同程度の生起率である。

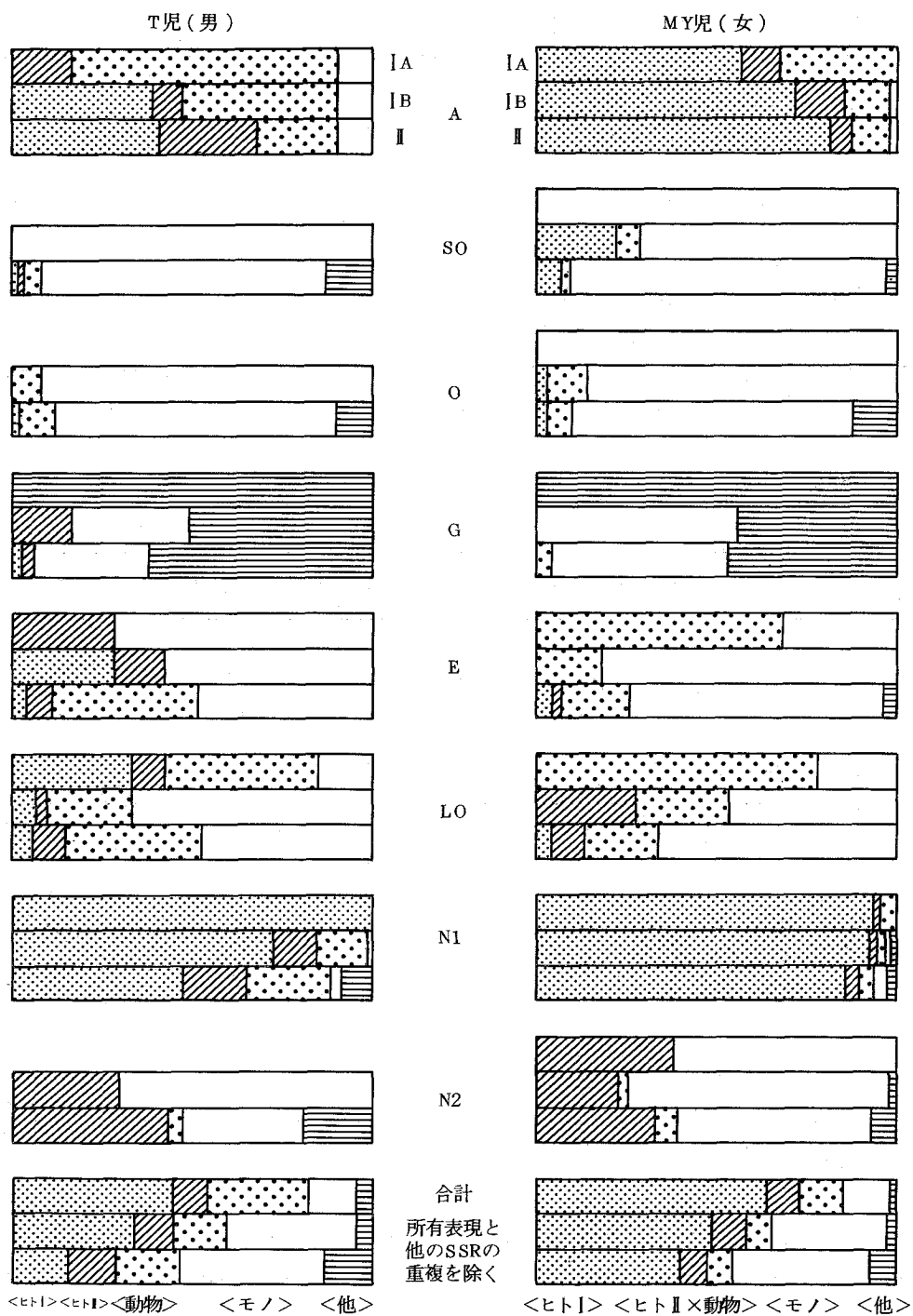


図1 SSRごとの意味クラスの生起率(時期別)

全体としてT児の発達は

1) (I A)では1つのSSRに現れる意味クラスが少なく偏りが大きい。(I B), (II)と進むにつれて平均化の方向へ変化している。

2) ただしAとLOでは少し様子が違っている。Aは(I A)では<動物>が75%を占め,(I B), (II)と進むにつれてその占める割合が低下し,<ヒト I>が優勢になっている。後になるほど動作主格としての特徴が明確になっているといえる。LOの場合は(I B)・(II)では<モノ>が50~60%を占め,<ヒト>は<ヒト I>・<ヒト II>とも数%ずつであるのに,(I A)では<ヒト I>が1/3使われている。存在表現は(I)では動詞の形は「アッタ」「ナイ」幼児語の「ナイナイ」で,「いる」の系統はゼロである。(II)になって<ヒト I>+「いる」等の形が現れ始める。(I A)の<ヒト I> <ヒト II>は,主語のない発話も含め,総て「~どこ?」「~は?」に対する返答の形をとっており,しかも(I A)(1:4-1:6)のうち1:4~1:5,1週までに集中して現れている。1:5からは<モノ>や<動物>に自発的な発話(会話の応答ではあっても「強制」された発話ではない)が現れ始める。

例。1) (玩具のバスで遊んでいて)

大人:落ちたー。ないねー。

T児:ココー

2) 大人:キューピーちゃんとおはようした?

T児:ピッピチャン ココ

以上のことからLOの初期の<ヒト>はかなり特殊なものであって,T児の言語発達の自然な流れの中で出てきたものではないと考えられる。

3) 存在表現は(I)では「~ココ」という形が多いが,これは意味的に「~コレ」と同じ様に使われており,存在の場所を表すというよりは「原初的な名指し表現」とでもいうべき表現である(小村, 1981a)。そこでLOとEを較べてみると,(I A)のLOは別とすると,他は大体同じ傾向を示している(モノ>動物>ヒト II>ヒト I)。

4) 合計数では<ヒト I>が優勢な状態から<モノ>優位へと変化している。<モノ>の増加はOの出現とその増大によるところが大きい。Oでは<モノ>が80~90%を占めている。これに対し,<ヒト I>の多くをになっているのはN1であるが,N1に占める<ヒト I>の割合は(I A)では100%だが,次第に低下し,(II)では50%を割っている。(II)および(I) (II)の合計数では<ヒト II>を加えても<モノ>には及ばない。そもそも<ヒト>を主にとるSSRはAとN1の2つである。一方<モノ>を中心に取るSSRはOの外SO, LO, E, N2と数が多い。Gも<モノ>と位置語の両方をとっている。従って総数からみて<モノ>の方が多いのは当然とも言える。

次にMY児であるが,大体の傾向はT児と共通している。例えばSOとOは<モノ>が中心であり,(I A)にはわずかであると言う点,Gは(I A)では1例であるが,(I B)・(II)では<その他>が半数,残りは<モノ>が大部分である点,N1は<ヒト I>中心,N2は<モノ>中心で人間関係の<ヒ

トⅡ>がそれに次ぐ等である。異なる点としてはAが(ⅠA)から<ヒトⅠ>が半数を占め、(ⅠB)～(Ⅱ)と増え続けていることである。有生物がほとんどという点はT児と同じである。LOとEは<モノ>が多いが、他の意味クラスもかなり出ており、いわば両刀使いである。

全体としてみると、

1) T児が後になるにつれて意味クラス数が増え、平均化しているのにたいし、むしろ特定の意味クラス(<ヒトⅠ>か<モノ>)が増加して、いわば特殊化する傾向を持っている。たとえばAでは<ヒトⅠ>が(ⅠA)→(ⅠB)→(Ⅱ)と増加し、LOでは<モノ>が増加している。Eでも<モノ>が70%を占めており、N1では<ヒトⅠ>が多少減っているとはいえ、(Ⅱ)においても85%まで占めているというように。

2) LOとEを比較する。T児の場合は一貫してLO>Eであったが、MY児では(Ⅰ)ではLO>Eだが(Ⅱ)ではLO<Eである。名詞の意味クラスの点では良く似ていて、<動物>は(ⅠA)でもっとも多く、(ⅠB)・(Ⅱ)でも重要な位置にある。(ⅠA)では少なかった<モノ>が(ⅠB)～(Ⅱ)と増えている。(ⅠA)ではこの2つの意味クラスしかみられない。異なっている点は<ヒトⅡ>である。Eでは(Ⅱ)に2例見られるだけだが、LOでは(ⅠB)で6例(26%)、(Ⅱ)で7例(8.9%)あり、(ⅠA)で多かった<動物>を「押しのけて」いるかのようである。

例。1)「マーブチャン ナイ」(友人の名)

2)「アカチャン イタ」

3)「オバチャン イタ」

MY児の存在表現の位置語は、(ⅠA)では「アッチ」(ⅠB)で「ココ」になっているが、2語文は(Ⅰ)にはほとんど見られない。(小村, 1981a)では(ⅠA)では未分化な方向表現、(ⅠB)で意味的には存在表現となるが、形態的にも存在表現が確立するのは(Ⅱ)であるとした。すなわち(Ⅰ)での存在表現2語文は大部分が「アル」「ナイ」という述語と結びついたものである。名詞文と存在表現の形態上の違いが使われる名詞の違いを生み出したのであろう。

3) 合計数でみると、T児と同様<ヒトⅠ>優位から<モノ>優位へと変化しつつあることが分かる。ただしこの傾向はT児よりは弱く(Ⅱ)でやっと<ヒトⅠ>と<モノ>とが同数になったにすぎない。(Ⅰ)～(Ⅱ)を通すとまだ<ヒトⅠ>の方が多い。<ヒトⅠ>をにう SSR-AとN1-が多いためである。特にN1は(ⅠA)ですでに103例((ⅠA)の64.4%。T児の(ⅠA)では33.9%)、(Ⅱ)でも32.2%を占める(T児の(Ⅱ)は19.1%)。しかもそのN1の中に占める<ヒトⅠ>の割合が圧倒的に多い。Aについても<ヒトⅠ>は後になるほど増え、平均でも78.7%である。この2つの理由で<モノ>がEやLOにおいて大幅に増えているにもかかわらず、<ヒトⅠ>よりも多くなっていないのである。

4. 考察

1) これまで見てきたように各SSRには意味クラスという点ではっきりした特徴がある。ここで取り

扱った SSR の中では G が <その他> (位置語) を多くとるほかはすべて <ヒト I> か <モノ> が中心になっている。そこでこの 2 つの意味クラスだけの生起率を SSR 毎に見ると (図 2), SSR は <ヒト I> が中心的な意味クラスのものとか <モノ> が中心的な意味クラスのものに分けられることがわかる。これをそれぞれ <ヒト> 系・<モノ> 系と呼ぼう。そうすると位置語・方向語の多い SSR (例えばここで省いた存在表現の位置語 LL) は <トコロ> 系と呼ぶことができる。<ヒト> 系は A と N1, <モノ> 系はそれ以外の SSR である。G も <その他> とともに <モノ> も (I B) から多く使われており, <トコロ> 系とばかりはいえないようである。

2) 子供の発話の中でかなりの部分を占めているのにこれまで触れなかった <動物> について考えてみよう。この中には実物の動物を始め, めいぐるみ, 人形, 絵本の動物を含めた。従って有生物と無生物の両方の性質を持つ。実際には実物の動物よりもめいぐるみや絵本の動物についての言及の方が多い。A は「意図的な動作の主体」(柴谷, 1978)「自ら動作を起こす有生名詞句の格」(井上, 1976)であり, 定義的にも有生物である。子供の場合も <動物> は現実には動かない場合が多いが, 動くものとしてとらえられた上で「マンマスル」とか「ネンネスル」等の発言があるわけであるから, 有生物として取り扱われている。また N1 も子供の場合 <ヒト I> を始めとする有生物のとする SSR として位置づけることが出来る。O や SO や G に少ないということもうなづける。ただ O と SO には 10% 前後使われている場合もあり, 特に O では <ヒト I> よりかなり多く使われており, <ヒト I> より <モノ> に近い面もみせて

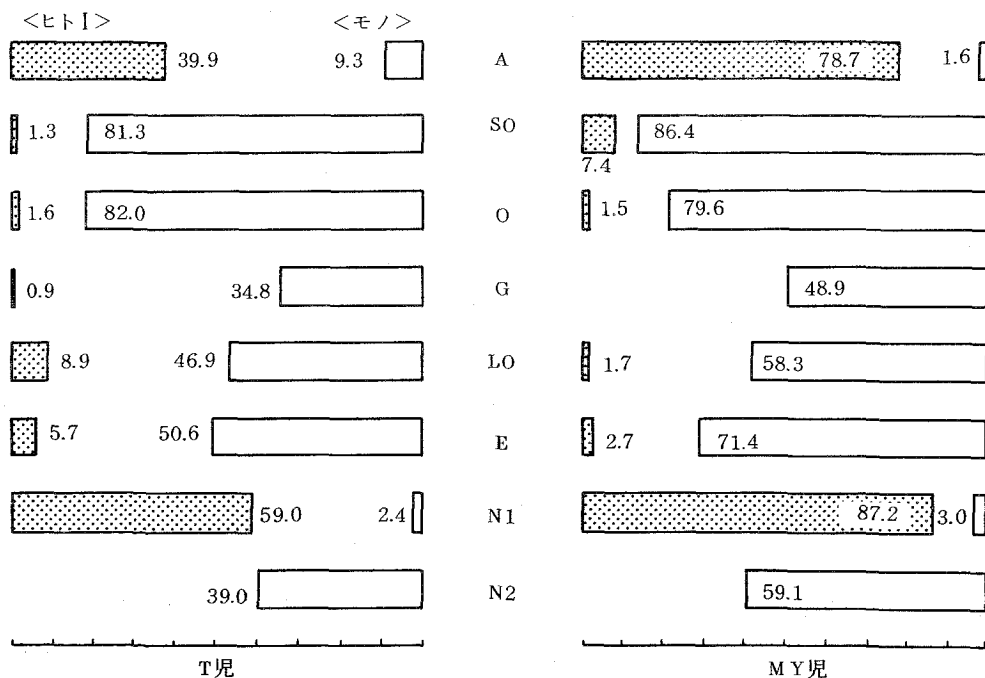


図 2 SSR ごとの <ヒト I> <モノ> の生起率 (通算)

いる。

ではEとLOはどうであろうか。両者とも定義上は無生物とも有生物とも決められないはずであるが、事実は<モノ>の方が多い。名詞文「コレ～」は、意味的には物の名称を指摘する場合（名称文）と、「コレ～ノ」と所有者を指摘する場合（所有者文）とがある。所有者文のばあいはEの意味クラスはN2のそれになるのだが、これは<モノ>が多い。名詞文に占める所有者文の割合は「コレNノN」も含めてT児で20%，MY児では57.1%に上る。これを除いた名称文における名詞意味クラスの状況を見るとT児ではやはり<モノ>が半数以上であるが、MY児は（ⅠA）ですべて<動物>，（ⅠB）・（Ⅱ）では<動物>と<モノ>とが約半数ずつになっている。

LOの方も両児とも<モノ>について<動物>が多い。LOとEは<ヒトⅠ>が殆どなく、<モノ>が半数を占めているわけであるから、定義上はともかく、子供の場合には<モノ>を表す表現といえるであろうし、その場合<動物>も<モノ>に近い扱いになっているといえるのではないか。<ヒトⅠ>であれば身近な人であり、存在が前提されているのだから、わざわざ名付けたり、存在を指摘するまでもないのである。

<動物>は存在表現の述語の使われ方をみても<モノ>と<ヒト>（有生物）の中間的存在（両者が混じりあっている）であった（小村，1981a）が、名詞意味クラスによる分析でもそれが当てはまるようだ。

3）存在表現と名詞文が共におもに<モノ>を表すのに使われていることは既に述べた。次に所有表現のN1とN2についてみてみよう。図1で見られるとおり、N1は<ヒトⅠ>，N2は<モノ>が中心である。特に（ⅠA）ではもっぱら「<ヒトⅠ>の<モノ>」という形で所有表現がなされている。意味的にも狭義の所有がほとんどである。所有表現には「N1のN2」という形と共に、「N1の」という短い形がある。小村（1981b）では「N1の」は初期には「N+所有標識」，それが「NのN」の確立に伴って（大体Ⅱへの変化の時期）その縮約形に転化するという仮説を立てた。「Nの」は初期には照合対象としてのモノはあるが、言語構造としてはN2は持たないということである。小村（1981c）は「NのN」が確立する以前には、N1が核である可能性を指摘した³⁾。いわば<ヒト>を介しての<モノ>自体の指摘といえる。これはMY児とT児を較べると圧倒的にMY児に多い。一方もうひとつの<モノ>へのアプローチである存在表現は、全体の傾向に反してT児の方が多い。これは（ⅠA）からⅡまで一貫している。T児を1としたMY児の相対発話比率は1.0～1.7が多い中で、所有表現は2.7～8，逆にLOは0.7である（表5）。しかしこれらは方法は違うが共に<モノ>自体の指摘ということで両者を加えてみるとほぼ他の傾向と等しくなる（N1の数は全所有表現を表しているので存在表現も表現されなかったものも含めた全LOで比較した）。また個人内の各SSRの比率を求めると（表6），やはりLOとN1で両児は大きく異なっている。他はかなり一致している。そしてLOとN1を加えてみると全体に占める比率が近似してくるのである。以上から、存在表現と所有表現は子供の場合Oなどとは違ってモノ自体を表現するSSRであるという点で共通性を持ち、子供がそれを人を介して行なうかどうかにより多く採用するSSRの相違を生み出すのであろう⁴⁾。

表5 T児に対するMY児の通算発話比率

SSR	A	SO	O	G	E	LO	LL	N1	N2	計	全LO	N1+全LO
比率	1.7	1.1	1.6	1.0	1.1	0.7	0.3	2.8	2.7	1.7	0.6	1.4

注 1) LL 存在表現の位置語。図1では省いてある。

2) 全LO 表現されなかったLOも含めた全存在表現。

表6 SSRの通算生起率(%)

SSR	A	SO	O	G	E	LO	LL	N1	N2	計	LO+N1	LL+N1
T児	9.0	4.8	15.7	7.4	5.6	11.5	15.8	18.8	11.4	100.0	30.3	34.6
MY児	10.4	3.3	18.2	5.4	4.5	4.6	2.8	32.7	18.0	100.0	37.3	35.3

注 1) 生起率はここに取り上げたSSR間のみのものである。

2) LL 存在表現の位置語。

MY児に<ヒト>を介した所有表現が多く、T児は<ヒト>を介さない存在表現が多いということは二人の子供の性格や環境等の諸条件による。T児はN1の意味クラスやAの数・意味クラスをみても<ヒトI>がそれほど多くない。(Ⅱ)ではよく平均化しており、<ヒトI>が特徴という感じはしない。MY児ではN1もAも<ヒトI>が大多数を占めているのと対照的である。MY児は<ヒトI>(特にSELF)中心の発話、T児は自己主張がそれほど強くなく他の人や物を視野にいた表現活動が多いということである。

4) 有生物を主にとるのはAとN1であるが、中心は<ヒトI>である。意味クラス間の関係は<ヒトI>が出てしばらくして<ヒトⅡ>が使われるようになり、ついで<動物>というような順次的なものではない。T児のN1のようにはじめは<ヒトI>のみという場合も次の時期には<ヒトⅡ>と<動物>は同程度に出ているし、MY児のAやN1のように始めから他の意味クラスも出ているSSRではやはり<ヒトⅡ>と<動物>の両方が出ている。T児のAの(I A)は少し特殊であったが、やはり<ヒトⅡ>と<動物>の両方が出ている。さらにこれらでは<モノ>が同時期に出現していることも多い。数値の多少はあるが、子供の言語表現活動という点からみれば、<ヒトⅡ><動物><モノ>には質的な差異はみられず、同一レベルでとらえられている様に思える。<ヒトI>中心の段階から関心が<ヒトⅡ>・<動物>・<モノ>へと同時的に広がっているのである。

5) 次に大人の発話との比較を部分的であるが試みる。T児の(I A)(I B)(Ⅱ)から1セッションずつを取り出して、子供と対話している大人の発話のSSRと意味クラスを、子供のそれと比較した(表7・表8・図3・図4)。T児のものは、1分類項あたりの数が極端に少なくなるので1セッションだけの比率にはあまり意味がないが、それでも全体的な傾向は反映されているようだ。大人の発話においても

表7 T児のSSRと意味クラス(セッション例)

		A	SO	O	G	E	LO	N1	N2	計 ^注
(ⅠA) T18 1:6	<ヒトⅠ>							6		6
	<ヒトⅡ>	1								1
	<動物>	1								1
	<モノ>	1								1
	<その他>									
	計	3						6		9
(ⅠB) T25 1:8	<ヒトⅠ>	1						11		12
	<ヒトⅡ>									
	<動物>	1					1			2
	<モノ>			7	1		1	1	2	12
	<その他>									
	計	2		7	1		2	12	2	26
(Ⅱ) T31 1:11	<ヒトⅠ>	1				1	1	9		12
	<ヒトⅡ>	5			2		1		2	10
	<動物>	4						2		6
	<モノ>		1	9	2		2	1	8	21
	<その他>			1	3					4
	計	10	1	10	7	1	4	12	10	53
(Ⅱ) T39 2:2 60分 換算	<ヒトⅠ>	4.6						5.1		9.7
	<ヒトⅡ>	3.4				1.7	0.6	0.6	4.6	10.9
	<動物>	0.6	0.6	0.6		1.1		4.0		6.9
	<モノ>	1.7	3.4	12.6	1.1	1.7	1.1		3.4	25.1
	<その他>		1.7	1.1	7.4					10.3
	計	10.3	5.7	14.2	8.6	4.6	1.7	9.7	8.0	60.0

注。所有表現と他のSSRの重複を除く。

SSR毎の傾向はみられるものの、むしろセッション(場面)による違いが大きくなっている。大人の発話の意味クラスはすべてのSSRにおいて子供のものよりも多様である。そしてSSR毎ではばらつきがあっても、発話全体では各意味クラスの比率はほとんど差がみられない。T児の場合も全体ではかなりばらつきは少なくなっており、(Ⅱ)のT39(2:2)では大人の比率と実質的には等しくなっているといえよう。

6) 1歳までに<ヒト>と<モノ>の区別、身近な人(=<ヒトⅠ>)と見知らぬ人の区別を獲得した

表8 大人のSSRと意味クラス(セッション例)

		A	SO	O	G	E	LO	N1	N2	計注
(ⅠA) T 18 60分	<ヒトⅠ>	18		1				10		29
	<ヒトⅡ>	10						5	1	15
	<動物>	16		7		1	2	10		36
	<モノ>	3	3	24	3	3	6	1	17	47
	<その他>		1	1	5	3		1	5	11
	計	47	4	33	8	7	8	27	23	138
(ⅠB) T 25 60分	<ヒトⅠ>	27	2					11		40
	<ヒトⅡ>	1							2	3
	<動物>	6		3		4	2	2		17
	<モノ>	2	6	33	6	3	1	1	6	56
	<その他>		3	4	10		1	1		19
	計	36	11	40	16	7	4	15	8	135
(Ⅱ) T 31 60分	<ヒトⅠ>	20		2		2	2	8		34
	<ヒトⅡ>	5	2	2	2	18	7	3	18	50
	<動物>	25	12	3	2	13	8	19	4	82
	<モノ>		7	34	10	6	13	11	16	91
	<その他>		4	3	13	3		3	3	27
	計	50	25	44	27	42	30	44	41	284
平均	<ヒトⅠ>	21.7	0.7	1.0		0.7	0.7	9.7		34.3
	<ヒトⅡ>	5.3	0.7	0.7	0.7	6.0	2.3	2.7	7.0	22.6
	<動物>	15.7	4.0	4.3	0.7	6.0	4.0	10.3	1.3	45.0
	<モノ>	1.7	5.3	30.3	6.3	4.0	6.7	4.3	13.0	64.7
	<その他>		2.7	2.7	9.3	2.0	0.3	1.7	2.7	19.0
	計	44.3	13.3	39.0	17.0	18.7	14.0	28.7	24.0	185.7

注。所有表現と他のSSRの重複を除く。

子供は1歳なかばから2歳前半にかけて「自我の誕生から拡大へ」と向かう(田中, 1984)。1歳ごろには8カ月頃の人見知りにも似た現象(母親に対する強い愛着と見知らぬ人や場所に対する警戒)が見られるが、これは子供が「まわりの環境を新しい視点でみはじめた」しるしである(長島, 1977)。この時期の子供にとって<ヒトⅠ>とその他の意味クラスは心理的にも対立するものとして捉えられているのである。(Ⅱ)の時期にはいると(通常は2歳前後)⁵⁾、大人との会話が可能になるなど⁶⁾自我が確定し、自分以外の人を自分と区別した形でしっかりと受け入れられるようになる。そのことが一方では、自分以

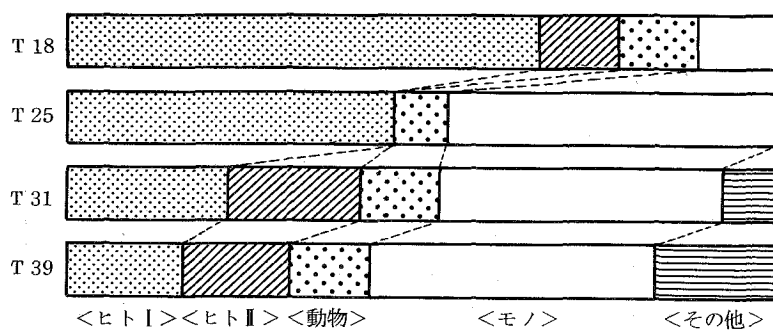


図3 T児の意味クラスの生起率(セッション例)

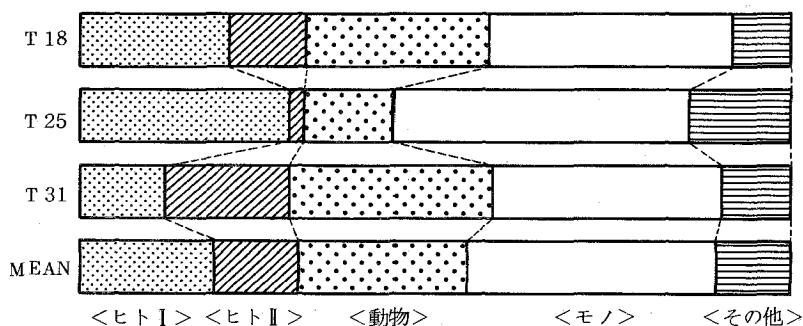


図4 大人の意味クラスの生起率(セッション例とその平均)

外の世界への関心の広がりとして現れると、表現する意味クラスの多様化につながり、また、自己主張の強まりとして現れると、「自分の物」への執着が所有表現「SELFの」の増加となる。さらに自我の成立は、所有表現においては「他人の物」の理解・「NのN」の意味の多様化としても現れている(小村, 1981b)。このように言語発達にはその時点での子供の精神発達が反映されているのである。

5. まとめ

- ① <ヒトⅠ>と<モノ>がもっとも多く表現される意味クラスである。両者は相補的な分布をしている。
- ② <ヒトⅡ>は周縁的な有生物である。<動物>は無生的な分布と有生的な分布の両方を示す。後者の場合<ヒトⅡ>とよく似たふるまいをする。
- ③ <ヒトⅠ>と他の有生物とは初期にははっきりした相違がある。これは2歳を過ぎると小さくなる。
- ④ 合計数では<ヒトⅠ>優位から<モノ>優位へ、そして平均化へと向かう。大人の場合にはSSR毎の意味クラスの使用頻度にはばらつきはあっても合計では大体平均している。子供の場合それに近づく傾向が2歳過ぎに見えはじめており、これはSSR数の増加と軌を一にするものである。

⑤ SSRの特徴のうち所有表現と存在表現は、アプローチの方法は異なるが<モノ>の指摘という共通の機能を持つ。

⑥ 名詞文も子供の場合<モノ>の指摘に使われるが、「コレ～」という「名称文」のほか、「コレ～ノ」と所有者を主張する文（所有者文）がある。やはり<モノ>の異なった視点からの表現といえる。

幼児にとって<ヒト>と<モノ>とはその持つ意味が大きく異なり、それは言語行動の上にも現れている。初期においてヒト（身近なヒト）は行為の為し手であり、モノの所有者である。モノはヒトとの関連でいえば行為の受け手であり、所有されるものである。更にどこかに存在したり、名称を持つと言う性質のものである。名称文・所有表現・存在表現は形態は異なるが、モノそのものへの言及という点で共通の働きを持つ表現である。

<ヒト>の中でも身近でないヒトは<動物>とともに本来は無生物ではないが、表現上は身近なヒトと対立する傾向が初期にみられる。2歳を過ぎるとこの現象は解消し、意味クラスという点ではおとなと子供の相違はほとんどみられなくなる。これは子供の自我発達の反映であるといえよう。

注

1 「基本的文習得の時期」というのは動詞文の意味関係やモダリティーについての考察の中で出てきた概念で、その特徴は数少ない意味関係（＝基本意味関係。動作主・対象格・目標格・存在文の主語・存在文の位置語）を高い頻度で使う。格助詞は余り使われない。モダリティー部では、<する><した><しちゃった><して><してる>（<しない><しよう>）（＝主要動詞型）がほぼ決まった順序で生じてくる。その後ここで言う(Ⅱ)には多様な意味関係が数は少ないが、多く助詞を伴って、短期間に現れてくる。モダリティー部では動詞型の多様化と構造化が行われてゆく。(Ⅰ)は所有表現・存在表現その他から考えても2語文が主で意味的にも統語的にも十分構造化されない、ヨチヨチ歩きにも相当する過渡的な段階であり、この時期のみの独特な性質を持つと思われる。天野（1976）は初期文法と呼び、「統辞意味論的ないくつかの初歩的なクラスが形成されたとしても、もっとも形成されやすい名詞においても、また文法的な『品詞』としての名詞はこの時期には形成されない。」と述べている。

2 統語－意味関係（SSR）とは、幼児言語の特徴を細かくみるために単一の基準を設けず、主語・目的語といった統語クラス、動作主・対象といった意味関係、所有表現・存在表現といった文タイプによる分類等を総合した呼び名である。

3 初期の子供の所有表現には次の例のように大人ならば「名称」で表現する所をN1で表現する場合がある。

T15（1：6）（Fの鍵）これ なに？ トーチャンノ

T22（1：7）（Iの衣服）これ なに？ ネーチャン

T27（1：9）（Mの持ち物。いいもの見つけたという感じで）

クルノ（SELF）アッター！

T 28 (1 : 9) (I の万年筆)	これ なに ?	ネーチャンノ
	ねーちゃんの なに ?	ジジ
T 28 (1 : 9) (スリッパ)		ツクルノ トッテキテ
	つくるの なに とってくるの ?	アカイロ トッテクルノ
MY 22 (1 : 4) (I の鞆を蹴飛ばす)	なに けとばしてんの ?	
		オカアサンノ
MY 23 (1 : 4) (牛乳を見て)		アッター
	あった ? なに あった ?	オカアサンノ
	牛乳ねー ないないしとこうね	オカアサンノ
	みおちゃんのは ?	ミオチャンノ
	(帽子を指す)	
MY 23 (1 : 4) みおちゃんの	なに さがしてるの ?	ミオチャンノ
	なに これ ?	ミオチャンノ

この時期の子供にとってももの名前はものの属性の一つという指摘があるが(ヴィゴツキー, 1956), 所有者も同様であり, 子供は場合によってどちらかを選択するのであろう。T 児の例では「アカイロ」という表現も同時に使われている。

4. 所有表現と存在表現は大人の文法においても深い関連がある。柴谷(1978)は、＜辰ちゃんに恋人がある＞は＜山田先生に借金がおありになる＞と同じく与格主語をとる所有文であり、＜辰ちゃんに恋人がいる＞は主格主語をとる存在文であるとするが、意味的には両者はほとんど同義である。また、多くのヨーロッパの言語において存在文が「持つ」を意味する語を使って表されることもよく知られている。例えば、フランス語・スペイン語・イタリア語・南部ドイツ語・セルビア語・ブルガリア語・近代ギリシア語等(イエスベルセン, 1924)。逆にロシア語の＜У меня～＞のように所有表現を存在表現の形で表す言語もある。英語の＜This room has no window.＞は意味的には存在文であり、主語の Animacy が所有文か存在文かを定める点では先に挙げた日本語の例文の場合と同様である。

5. T児もMY児も2語文が1:4で出現しているが、これは一般的な言語発達に較べてかなり早い。大久保(1967)でも1:6である。そもそも言語発達研究の対象となった子供は、そうでない子供よりも大人からよく話しかけられ、関心を持たれ、注目されている。従って平均的な発達よりも早くなる傾向があると思われる。天野(1976)では、1歳後半~1歳終わり頃は「前文法的結合の段階」(2語文の前段階)とし、「初期文法形成の段階」は、1歳末~2歳としている。

6. 村井(1970)は会話の発達について「1:11まではひとりごとの方が多く、1:10からは会話状況の発声の方がひとりごとより多くなり、ひとりごとは1:11以後、急速に減少していく。」「1:11…になると比較的長い会話が可能になる。」と述べている。1:11というのはこの子供の場合ここで言う(Ⅱ)に入った時期と考えられ(小村, 1979), ここでも言語発達と精神発達の一般的な関連性を示してい

る。

引用文献

天野清 (1976) 『言語心理学』 (共著) 新読書社

CHOMSKY, N (1965) Aspects of the Theory of Syntax. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

イエスペルセン (1924) 『文法の原理』 半田一郎訳 岩波書店

井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (下)』 大修館書店

大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』 東京堂出版

小村 (田村) 晶子 (1973) 「1才児の言語発達」 乳幼児保育研究 1号

— (1974, 1975) 「2語文期における動詞文の発達について」 乳幼児保育研究 2, 3号

— (1978, 1979) 「言語発達初期における意味関係および動詞モダリティーについて」 乳幼児保育研究 5, 6号

— (1981a) 「存在表現の発達 I—形態を中心に」 (堀素子・F. C. パン編『言語習得の諸相』文化評論出版)

— (1981b) 「所有表現の発達 I—『NのN』の獲得とその構造」 (同上)

— (1981c) 「所有表現の発達 II—機能と用法」 第5回 ICU 幼児言語学シンポジウム

村井潤一 (1970) 『言語機能の形成と発達』 風間書房

— (1978) 「ことばの発生(1)」 (村井潤一編『ことばへのアプローチ』ミネルヴァ書房)

長島瑞穂 (1977) 『ことばとつたえあい』 ミネルヴァ書房

柴谷方良 (1976) 『日本語の分析』 大修館書店

武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・竜野俊子・斉藤こずゑ (1981) 「生後2年間の伝達行動における対人・対物行動の発達」 教育心理学研究 第29巻第2号

田中昌人 (1984) 『子供の発達と診断 3—幼児期 I』 大月書店

ヴィゴツキー (1956) 『思考と言語』 柴田義松訳 明治図書

(こむら あきこ, 研修員)